



岷江入楚

梅枝

弟三

特別
~ 12
4604
31



47
112
464
31



梅枝

廿九歲

太政大臣

小汀文庫

春之御元服可為二月明石御堂表着日也

二月廿日源氏君合薰物給事

二月十日廿二日春之御元服給事

控御院送薰物松原氏竹也 瑞瑞器二付梅枝

所方合薰物各被奉原氏廿二日宮判竹也

春院上之方源氏侍從 紫上梅花 花散里一行葉

明石上薰衣方

終夜合物音控給事 明朝廿二日公竹也

明石姫君所裳衣也 控御院中又所方也

女余日春之御元服也

明石姫君入内廷日也

所調度色之御菓子也

所方之御菓子也

源氏書之御菓子也

皇戸つてふ春の条院竹市。宮内省子相春竹市
人々多跡あり

皇戸つてふ古宮内省源氏帝古系此小集延政古今集本竹市
内大臣殿恩顧や音為作書あり
源氏君教訓赤子宰相申竹市
内大臣方々云々作一説竹市は月夕古宮宰相申將
有以書あり 世房と云ふ

梅枝 以詞為卷名 必美名以詞号く

河巻名董の物合し後予が將取柏子歌梅し枝
源氏廿九歳二月乃ゆいをも美原氏廿九
梅枝の権馬来とてうらつるあり 白河守の亂事也 予て書

御裳子けり 河明石申の書者裳 十二歳

河字つるれ物流し藤原書れありとてあつらふとていふこと
裳字はゆきとていふこと
あしは作書の内しふ十二歳しうつるれりてあめめと
ゆいといふこと
明石申の書者十二歳しうつるのありとてあつらふとて裳
とてあめめとていふこと

春又もかろし... かくのし

又今とくし... かくのし

西三行... 終

又時應和三年二月廿一日元服... 後並山前... 殿令大納言... 位託朝臣... 晦日... 乃皇子... 又冷泉院の二月の節と換せり

わろし... かくのし

明石館書の内... 春書一... 原の董地潤合し

大戴の... 大戴の... 大戴の... の美... かくのし

しわ... 秘勅物云大戴... 潤色... かくのし

河村下集云大入道... 潤色... かくのし

末の... 潤色... かくのし

れ了... 潤色... かくのし

手紙の紙切れ

春交もかるし... 春交のしるし

又今としとらぬ

河冷泉院春交時應和三年二月廿一日元服... 曆七年二月甲子皇太子如元服... 殿令大納言後二位皇太子傳藤原朝臣建徳中納言後三位朝臣般舟兩人手加其冠于時大貳道雅朝臣二月晦日... 乃皇子今月十二歳元服... 又冷泉院の二月の節と換せり

つらいつらいつと

明石熊麁の入りし布ありと... 春交

ふらふら物ありと

原の董地潤合

大貳のつらいつらいつと

大宰大貳二任五ヶ... 大貳のつらいつらいつと... の美... 大貳あつらいつと... 大貳あつらいつと... 大貳あつらいつと

しわのし... 秘助物云大貳... 必潤色あり... 必潤色あり... 必潤色あり

河村下集云大入道殿... 必潤色あり... 必潤色あり... 必潤色あり

道雅朝臣 于時大貳

末のせ... 梅の香... 梅の香... 梅の香

れりし... 乃のりし

必新渡の香... 必新渡の香

か... 必新渡の香

香... 乃のりし... 乃のりし... 乃のりし

らつこふいふの物のかりいとも物とねのり
何物覆敷設南詩文南暢較注南虎皮

こゝろハ端縁

瓦沓の沓代ぬきつるこころとれもまうとせむるあわい
何高廉人元原氏相しりし人後継金錦金と織竹と淨

金堀の類

山原と鴻臚館少く相し時とらまうりしゆれらるる

いふこころ金堀とれ類し被金綺とせり私比金錦とあり

ゆんしりわもゆ

それ物くよ似合らる後し心決しそからしせ

あつこいのわやうも物

何後罪

もぬ所のる廉人乃ま物をもまうりしゆれらるる

うも物とらうこま所の心らうりしゆれらるる

しりしゆれらるる

美大氣のなれり大氣のなれり新派の物

かこもハ 沈香入

私言必沈香くしりまうりしゆれらるる

二つうつありせしゆれらるる

必ありしゆれらるる煮地と合をせしゆれらるる

私言昔今れらるるあり煮地をも香具とらうり

二行つ合をのり

とらうり物かんとらあれらるる

そのいひもあつれし

かこもそのこと

鐵曰 香細鴉着和供入鐵曰鴉五百杵 茅山太平觀記

何いふこととむ

深比の糸沓の寢殿あつるゆり物とありしゆれらるる

そのいひもあつれし

何古本大略そじりやわり頗不傳とせきそとと展帖

古字れ漢りそりしゆれらるる私和氣とて院有共物液も大

業と大らるるちりしゆれらるる私和氣とて院有共物液も大

黄松音今
くすくす
古本大略
方元なり

安室佛像列供具東廂を八僧座又小平七年十二月
十七日湯成院七十湯院正殿西放出才之間立螺鈿倚子
小右記永觀元年二月二日申之天卿命儀二重院
東對南放出三石儲ら座水上對座立臺盤母屋懸簾
底不懸三四位朝臣座を南廂西上北面右以け不記加料
管者謂放出南西母屋之右河海日廂者誤し不記寢
殿母屋南中央書之傷之而謂子之書を式以障子南方
力放出心力内方南放出申之帳臺をより之財撤之次
在放出西放出よりス正殿力中央而東西者を殿謂東對
西對之寢殿与對之間を透流を不及對座能の時を西備云
つ座子子午申門能つきつと對代とよし東西對代
取東對母屋を東放出より西へ准之物故若菜英之南か
のらるらつてはむしよりそつんゆらめあつてはなれ
いさよつさめふ又とらるらつては西れなりといふ
流へぬてそそこれこれ對座をなげけり母屋れつたに
そ又えとそあのもうらつてはといのちらといふは

たうつり大物波よつる皆に重院れりとしあらくも放出
か南西れ母屋をみよりそれより西をそらつては西れ對
の放出とそん梅のののひんこれ申の放出といはる
對の母屋より申しては母屋と東向れ廂とのより障子と
ゆつてつたれは流帳とつてはと申れ放出といへ
るし業とれを納りをもよひの東の對れ放出
原代老し世對寢殿よりとりまうらつては中
よりそはこれ對の放出か少くあつては業とれ合とよふ
者か入る業はりり西の放出といつる西對れ放出は
とら合てみすつとそしは業はりり對を二ありとみり
妻
を島よりつて月にお流ら重院の東對の申れらるら
はるらるらるら方か城のわらへい
花多ふらつてお流ら西方よ小寢殿わ母屋れ申を
て流帳をふる物母屋の中とつてお流らしとあら
てといふは流の力
す
小心ぬらるらるらとらつてはとお流らしとあら

壺と入二合一あり煮物と納材いけ煮物ハ梅の花
 柴侍後若者として納仕に壺の申よりや母壺と一併
 打まわつ煮菓ハ白汁指のまはれ物や長指一由一
 ぶりあり号入惟茶言二合折立目より一合よりこれと
 くるる壺このねのこいひれつあり一合よりこれと
 しつありつこの尿懸れ具のねは鶴れじついつり者壺
 ころいとさかえつれりありいねのあらまはれ物と
 母者ハ納く言と帳方よりせ西果よりさしてむしよ
 目入推切ゆい厨子女の腰は造出言二合折立の梅の
 造紙やり二合を切角れさうつ下の腰ハ梅言二合九角
 皆梅入塗子也祝わり打まわつと菓母屋桐皮也厨子十言
 合を中二合香壺の言ハ果の厨子のうりよと合
 表裏はりに入る梅花也祝り煮物や母壺と申されり
 さらさら張懸り月一灰のとよとしてるる二合
 納言入前寄赤母屋のつたれこれ中に申言葉言ハ
 紅言は言をうりハ松梅子とていふとてしよと壺三

とき入地ハさかひのついで火久の酒屋の黒い桶
 少〜ハ〜壺の言ハとあり梅言ハよ〜るも梅つこ
 と壺ハ言ハ〜るも梅言ハ〜るも梅つこ
 やとえ〜るも梅言ハ〜るも梅言ハ〜るも梅つこ
 入り角も〜るも梅言ハ〜るも梅言ハ〜るも梅つこ
 あり〜るも梅言ハ〜るも梅言ハ〜るも梅つこ
 梅言ハ〜るも梅言ハ〜るも梅言ハ〜るも梅つこ
 白記ハ〜るも梅言ハ〜るも梅言ハ〜るも梅つこ
 くり〜るも梅言ハ〜るも梅言ハ〜るも梅つこ
 母御者り〜るも梅言ハ〜るも梅言ハ〜るも梅つこ
 かり〜るも梅言ハ〜るも梅言ハ〜るも梅つこ
 普賢寺の言ハ〜るも梅言ハ〜るも梅言ハ〜るも梅つこ
 玉〜るも梅言ハ〜るも梅言ハ〜るも梅つこ
 のられ〜るも梅言ハ〜るも梅言ハ〜るも梅つこ

はなれまゝ
大なり
まねりあり

あこのくまははり
あつあつこのまへ

まへまへまへまへ
まへまへまへまへ

まへまへまへまへ
まへまへまへまへ

まへまへまへまへ
まへまへまへまへ

まへまへまへまへ
まへまへまへまへ

まへまへまへまへ
まへまへまへまへ

まへまへまへまへ
まへまへまへまへ

まへまへまへまへ
まへまへまへまへ

まへまへまへまへ
まへまへまへまへ

まへまへまへまへ
まへまへまへまへ

まへまへまへまへ
まへまへまへまへ

まへまへまへまへ
まへまへまへまへ

まへまへまへまへ
まへまへまへまへ

まへまへまへまへ
まへまへまへまへ

まへまへまへまへ
まへまへまへまへ

まへまへまへまへ
まへまへまへまへ

まへまへまへまへ
まへまへまへまへ

必花鳥此花也

弄 女此

裳

川つらつら花のうらみ

玉花のしほは花とそ花のゆめ

弄 子花のしほは花とそ花のゆめ

ささしほは花とそ花のゆめ

ささしほは花とそ花のゆめ

うぶしほは花とそ花のゆめ

よ原のつたは花とそ花のゆめ

くさしほは花とそ花のゆめ

もがしほは花とそ花のゆめ

いすしほは花とそ花のゆめ

よ原のつたは花とそ花のゆめ

いすしほは花とそ花のゆめ

くさしほは花とそ花のゆめ

もがしほは花とそ花のゆめ

梅花のつたは花とそ花のゆめ

人のこころは花とそ花のゆめ

ささしほは花とそ花のゆめ

いすしほは花とそ花のゆめ

字りし風流を花とそ花のゆめ

或は流し人のこころは花とそ花のゆめ

人のこころは花とそ花のゆめ

ささしほは花とそ花のゆめ

と花のつた

ささしほは花とそ花のゆめ

いすしほは花とそ花のゆめ

もがしほは花とそ花のゆめ

よ原のつたは花とそ花のゆめ

くさしほは花とそ花のゆめ

ちよとていふはなす

ほの所へ入るゝ小娘をたのむの法司のいふまゝのま

又もたつちる人のうへ けほは女子らるゝ

素寂秋 挑思 僻

外人不見と可笑 白氏文集

心原の早下れ何し 丹明を娘まゝにらるゝ

秋好仲文のいふとさるゝ

秋好仲文のいふとさるゝ

あつちもげよなうゝ

あやう物し 女と女師とくゝ

あやう物し 女と女師とくゝ

あやう物し 女と女師とくゝ

あやう物し 女と女師とくゝ

あやう物し 女と女師とくゝ

あやう物し 女と女師とくゝ

あやう物し 女と女師とくゝ

必 父とてあつてさう入るゝに非ざる人其徳も

いふにぬまひしすゝとていふにぬまひしすゝとて

異詞のつゝもあつてさういふにぬまひしすゝとて

又四方に一粒の心言一粒の心言

心言の心言の心言の心言の心言の心言の心言

心言の心言の心言の心言の心言の心言の心言

心言の心言の心言の心言の心言の心言の心言

心言の心言の心言の心言の心言の心言の心言

心言の心言の心言の心言の心言の心言の心言

心言の心言の心言の心言の心言の心言の心言

心言の心言の心言の心言の心言の心言の心言

心言の心言の心言の心言の心言の心言の心言

と云ふ二つとも

原の洞合れ二粒

右近の陣れみかみのりさうさうさうさうさうさう

必 美和例村に見るより

河 沖海流

近末東辰海後仁堯流昔者立石風流板也

流非一脈 順徳院中村

美和沖時右近陣の沖海流也此より甲の流代

相傳し其下をたつとて

埋蓋物自致

長寧云主三自妙也や極東方風白泥中地と據に

三丁とて用水邊地得朝陽埋う

と其朝長を合香し流物を入るを不れ下れと申

乃高所の埋う

知章朝長を埋五斗板を春秋七日夏二日冬十日

行佛... 梅... 沈香... 散里... 丁子... 二...

花... 散里... 丁子... 二...

花... 散里... 丁子... 二...

花... 散里... 丁子... 二...

花... 散里... 丁子... 二...

花... 散里... 丁子... 二...

花... 散里... 丁子... 二...

花... 散里... 丁子... 二...

花... 散里... 丁子... 二...

花... 散里... 丁子... 二...

花... 散里... 丁子... 二...

花... 散里... 丁子... 二...

花... 散里... 丁子... 二...

花... 散里... 丁子... 二...

花... 散里... 丁子... 二...

花... 散里... 丁子... 二...

花... 散里... 丁子... 二...

花... 散里... 丁子... 二...

花... 散里... 丁子... 二...

花... 散里... 丁子... 二...

花... 散里... 丁子... 二...

花... 散里... 丁子... 二...

花... 散里... 丁子... 二...

花... 散里... 丁子... 二...

花... 散里... 丁子... 二...

花... 散里... 丁子... 二...

花... 散里... 丁子... 二...

花... 散里... 丁子... 二...

花... 散里... 丁子... 二...

花... 散里... 丁子... 二...

李三録評可加凡合香古方

梅花竹葉菊を落葉する時よりあいつつていふ合

竹(うらむ)とく脚敵ありぬなり)

れ言明るとは冬の出るもれは落葉と合せばよからぬ

やん落葉もくはいのちもれはあつたてふにやぬ

つとくこれ梅花竹葉菊の白ひもさるべき

つわりを強ぬるる

これかしのりのもろれりい 蓮衣香

さる蓮衣香のさうつとせめてんといはれりはのよ

らしいつとまきまき百歩かきまきいん

こころ

けりいんといはれ蓮衣香百歩かき

あつりうらむくはんとみ

百歩一紙遠香をいつれとつて強之又之方百歩香

此出典朝臣 兼平此人 左孝清孫

ひんといはれ蓮衣香百歩かき

ひんといはれ蓮衣香百歩かき

ひんといはれ蓮衣香百歩かき

ひんといはれ蓮衣香百歩かき

ひんといはれ蓮衣香百歩かき

ひんといはれ蓮衣香百歩かき

ひんといはれ蓮衣香百歩かき

ひんといはれ蓮衣香百歩かき

ひんといはれ蓮衣香百歩かき

ひんといはれ蓮衣香百歩かき

ひんといはれ蓮衣香百歩かき

ひんといはれ蓮衣香百歩かき

ひんといはれ蓮衣香百歩かき

ひんといはれ蓮衣香百歩かき

ひんといはれ蓮衣香百歩かき

ひんといはれ蓮衣香百歩かき

朱崔院所奉... 西宮抄... 朱崔院
 初... 朱崔院... 朱崔院... 朱崔院...
 千金翼方云... 薰衣香

薰衣香 各三兩 薰衣香方 甲香 二兩
 善唐 五兩 青桂皮 五兩 料理略 沉 三兩 甲 二兩 二
 檀 二兩 青木香 二兩 丁子 二兩 古 一兩 二兩 麝香 一兩 大
 凡香附子代以鷄舌香若華板及納香代青木香
 代白檀
 伴方故或子所親王上
 又方此二名體身香
 丁子 藿香 零陵 青木 中松 各三兩
 白芷 當飯 桂 檀椰子 各二兩 麝香 一兩
 右十物細搗細篩為粉以蜜和搏二十抔之浸於丸漿

末核口合咽汁畫一夜三日別合十二丸當自覺口舌甘自
 覺體香十日衣被亦香十日逆風行他人因香廿五日洗手面
 水浴地香一月已後抱呪亦香已蒜及五辛亦平但
 口香體潔而已蓋亦治万病一方有香附子 二兩

美和百步香方
 甲香 小八兩 麝香 小一斤 古唐 小一斤 白檀 小八兩
 零陵香 小八兩 藿香 小四兩 身松花 小四兩 乳以香 十五兩
 白膠 小二兩 麝香 小四兩 樹膠 金 小二兩 右十一種
 搗密和之於沙器中咸埋經三七日取燒百步
 外圍香伴方出自四條大納言亦大以十古并上再
 沉 小四兩 二兩 煮 小一兩 檀 小一兩 丁 小三兩
 甲 小一兩 丁 小一兩 甲 小一兩 丁 小一兩
 沉 小四兩 丁 小三兩 甲 小一兩 身 小一兩 三兩

已上朱崔院所方
 薰衣香 一君黑方

沉大田西 丁大二両 甲大西二ふ 薫大いふ 大二ふ

百和合 字侍後

沉四両 丁二両 甲二兩以上大 金二両并 二両

以上仁和元年三月四日抄之増損

こ記乃朱雀院

古と集ふ朱雀院とあるに云子院に仍るは朱雀院と

寛平乃流ゆかしは此の朱雀院とあるは物次乃朱雀院

とあるに云子院の聖代合香と好くあるは此なり

と皇朝臣号後野井子右大弁後四位下天仁二年十月廿

光孝天皇御時又蔵口四紀子高右董物合好子

次孝天慶間右大弁と皇朝臣蔵人并小舎人大和常生

相並奉合香之伎

朱雀院の西門と云ふは此の朱雀院とあるは

とある朱雀院とあり

とあるは

薫香百歩香るるは此の朱雀院とあり

いつれを母いよとあり

重きなりといふは此の朱雀院とあり

くといつては此の朱雀院とあり

此の朱雀院とあり

此の朱雀院とあり

此の朱雀院とあり

此の朱雀院とあり

此の朱雀院とあり

此の朱雀院とあり

此の朱雀院とあり

此の朱雀院とあり

此の朱雀院とあり

此の朱雀院とあり

此の朱雀院とあり

此の朱雀院とあり

此の朱雀院とあり

マ 佐馬宗の秘
~~~~~

あせしあせし

~~~~~  
 又いふん~~~~~
 いふん~~~~~
 ぬ~~~~~

~~~~~  
 乃中乃宰相中将~~~~~  
 乃中乃宰相中将~~~~~  
 乃中乃宰相中将~~~~~

乃中乃宰相中将~~~~~

乃中乃宰相中将~~~~~

乃中乃宰相中将~~~~~

乃中乃宰相中将~~~~~





由車からくるりし〜

車よ牛〜

車よ牛〜

車よ牛〜

車よ牛〜

と原

花のよれよれ〜

ふあ〜

のふ〜

ゆる〜

ふ〜

〜

〜

〜

〜

三光自守  
第四  
小方若菜  
春三三  
け時七下  
云下人上

花の下れ〜

花のよれ〜

花のよれ〜

花のよれ〜

花のよれ〜

花のよれ〜

花のよれ〜

花のよれ〜

花のよれ〜

花のよれ〜

花のよれ〜

花のよれ〜

花のよれ〜

花のよれ〜

花のよれ〜

河美同く  
まはむら又ちまふんをわらひらりから  
しつらまよてあてありし様もたぬり  
やみだの縁と海のうみあつても  
くはまの山やよえなるね神と  
やまもしゆ申なりれ卑下せし  
縁とさう古く(海を古く)  
縁とさう古く(海を古く)

いふはれ神く

はらふはれ神く  
はらふはれ神く  
はらふはれ神く

はらふはれ神く

いふはれ神く  
はらふはれ神く  
はらふはれ神く

はらふはれ神く

はらふはれ神く

はらふはれ神く

はらふはれ神く

はらふはれ神く

はらふはれ神く

はらふはれ神く

はらふはれ神く

はらふはれ神く

はらふはれ神く

はらふはれ神く

はらふはれ神く

はらふはれ神く

はらふはれ神く

のられれよあしよ

申すおぼろなるは境代の間よあしよ  
まほしくしれい

或は元のまほしくしれい  
まほしくしれい

いささか

秋夜の間月何れもあしよ  
の例もあしよ

くささし申すあしよ  
の強ひけいれあしよ

申すのあしよ  
あしよ

あしよ  
あしよ

あしよ  
あしよ

あしよ  
あしよ

あしよ

あしよ

あしよ

あしよ

あしよ

あしよ

何競争

あしよ

あしよ

皆に縁をくわし  
 河をいし藤原をいし  
 世業のみみてすなよみしと  
 女をいし藤原をいし  
 常花物にぞいし  
 常花物にぞいし  
 常花物にぞいし  
 常花物にぞいし  
 常花物にぞいし

物に救の原は  
 美人そよまよし  
 美人そよまよし  
 美人そよまよし

たぢねをも

びた将軍高より

私河海は藤原  
 但末ちちねといふ人  
 いとねく

河の河くすあま  
 人そよまよし

えいとのよら  
 あま

ほの竹詞  
 入はありて  
 入はありて

のまらめとわ  
 せりて

うられさや  
 ここの娘を  
 夫ありて

何處に  
 花実ある  
 母もよまよし

うらふの物  
 舟に  
 のりて

まはさゆ  
 いろはふ  
 つき

あまのひね

明らけ  
 娘を  
 入白

けあつ  
 いろは

原を  
 居る  
 将軍  
 明ら

春を  
 んと  
 返り  
 行く

きいけ  
 せん

藤原を  
 高

梅枝  
 花を  
 居る

むく  
 せん  
 の  
 井

むく  
 せん  
 の  
 井

たつた  
 入白

河淑景舎 相乗(原氏の母更衣并原氏代)此曹子(うら)りし

あつたため(原氏)のひめ(原氏)のひめ

ま(原氏)のひめ(原氏)のひめ

ま(原氏)のひめ(原氏)のひめ

ま(原氏)のひめ(原氏)のひめ

ま(原氏)のひめ(原氏)のひめ

ま(原氏)のひめ(原氏)のひめ

ま(原氏)のひめ(原氏)のひめ

二月十二日為申(原氏)のひめ(原氏)のひめ

二月十二日為申(原氏)のひめ(原氏)のひめ

二月十二日為申(原氏)のひめ(原氏)のひめ

二月十二日為申(原氏)のひめ(原氏)のひめ

二月十二日為申(原氏)のひめ(原氏)のひめ

二月十二日為申(原氏)のひめ(原氏)のひめ

二月十二日為申(原氏)のひめ(原氏)のひめ

二月十二日為申(原氏)のひめ(原氏)のひめ

瘦殿北立二階一脚其上東置櫛連二双其下置香壺

連其下階置藥匣

い(原氏)のひめ(原氏)のひめ

い(原氏)のひめ(原氏)のひめ

い(原氏)のひめ(原氏)のひめ

い(原氏)のひめ(原氏)のひめ

い(原氏)のひめ(原氏)のひめ

い(原氏)のひめ(原氏)のひめ

い(原氏)のひめ(原氏)のひめ

い(原氏)のひめ(原氏)のひめ

い(原氏)のひめ(原氏)のひめ

い(原氏)のひめ(原氏)のひめ

い(原氏)のひめ(原氏)のひめ

い(原氏)のひめ(原氏)のひめ

い(原氏)のひめ(原氏)のひめ

い(原氏)のひめ(原氏)のひめ

い(原氏)のひめ(原氏)のひめ

い(原氏)のひめ(原氏)のひめ

い(原氏)のひめ(原氏)のひめ

い(原氏)のひめ(原氏)のひめ

い(原氏)のひめ(原氏)のひめ



申すの母に

秋好の母に

秋好の母に

秋好の母に

秋好の母に

秋好の母に

秋好の母に

秋好の母に

秋好の母に

秋好の母に

秋好の母に

秋好の母に

秋好の母に

秋好の母に

秋好の母に

秋好の母に

秋好の母に

秋好の母に

秋好の母に

秋好の母に

秋好の母に

秋好の母に

秋好の母に

秋好の母に

秋好の母に

秋好の母に

秋好の母に

秋好の母に





して控筆の御座りて業と云ふは

まゝにねらふに似たりしは  
河原の糸針に愛れけり第一腕草子の針より  
とて或草子の針に入らば針の針は業に次下よりの  
糸針の針はなるに似たりと云ふは針の針は業に  
糸針の針はなるに似たりと云ふは針の針は業に  
糸針の針はなるに似たりと云ふは針の針は業に  
糸針の針はなるに似たりと云ふは針の針は業に

兵戸の又左束の替

必書つて置て左束の替 不入系高 要

何れ左束の替 何人平るの出入大目子取

みつゝ一りりひきり  
必一双入

何一雙 糸子二枚入 屏風のつらりひき二枚入

糸一ひきりひきりひきりひきり

いひますりひきりひきりひきりひきり 屏風のつらりひきり

の針はなるに似たりと云ふは針の針は業に

糸一ひきりひきりひきりひきりひきり

糸一ひきりひきりひきりひきりひきり

糸一ひきりひきりひきりひきりひきり

糸一ひきりひきりひきりひきりひきり

糸一ひきりひきりひきりひきりひきり

糸一ひきりひきりひきりひきりひきり

糸一ひきりひきりひきりひきりひきり

糸一ひきりひきりひきりひきりひきり

糸一ひきりひきりひきりひきりひきり

かゝる書

えいせいといふ書を鑑むるより

人ふしや

河原甲

あめやうめいふえ

又厚く保りて作らる

こぼりみみのうすやうに

宰相申将式河高藤紙

宰相申将式乃中ね梅本

又忠誓二葉との片引し 矣と書式 或る書の息

あてて

あてて此の葉の紫の申し文字とくく水色

あてて

又文字の神條の葉は似る

或はあててと書するに繪よあてて

小といふは若と云ふ

あてて繪の申し文字とくく物

まゝのまゝ

あてて物のあてをわらうの例とくく

あてて

三月の末に月れ

あてて

あてて

あてて

あてて

を御あはしりし御二人の女房よもつらひにまをさ  
るしる御あはしりし

くらりし  
二三人えしあはしりし御あはしりし

けしるし  
昔に札をよもつらひにまをさるし

御あはしりし  
思ひおをさるし御あはしりし

御あはしりし  
河揚委 しの枝や 万葉に 枚浦 枚湖とありし字に  
よろしあはしりし皆色紙にまをさるし

御あはしりし  
私赤白の女房のしるしをよもつらひにまをさるし

御あはしりし  
御あはしりし

御あはしりし  
衣しるし

御あはしりし  
御あはしりし

御あはしりし  
御あはしりし

御あはしりし  
御あはしりし

御あはしりし  
御あはしりし

御あはしりし  
御あはしりし

御あはしりし  
御あはしりし

御あはしりし  
御あはしりし

吾は... 風流... 後...  
...  
...

... 又双紙...  
...

... 但双紙...  
...

... 班超...  
...

... 久事...  
...

... 或班超...  
...

か... 河... 下... 中... 日...  
...

三光自筆

か... 黄... みの...  
...

か... 黄... みの...  
...

か... の... の...  
...

吾は... 風流... 双紙... 牧... 毎...

を... 又双紙... 牧... 毎... 行... 但双紙... 文字... 原...

班超... 久... 今... 原... 或... 班超... 拾... 文... 原... 矢... 矢... 矢...

矢... 矢... 矢... 矢... 矢... 矢... 矢... 矢... 矢... 矢...

か... 御... 中... 御... 中... 御... 中... 御... 中... 御... 中...

必... 御... 中... 御... 中... 御... 中... 御... 中... 御... 中... 御... 中...

私... 業... 御... 中... 御... 中... 御... 中... 御... 中... 御... 中... 御... 中...

か... 御... 中... 御... 中... 御... 中... 御... 中... 御... 中... 御... 中...

原... の... 御... 中... 御... 中... 御... 中... 御... 中... 御... 中... 御... 中...

Handwritten notes on a separate piece of paper at the top of the page.

~~~~~

河原

かたはら~~~~~

~~~~~

河原 和ヤチヤカリー

~~~~~

和ヤチヤカリー~~~~~ 高藤の紙の~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

河原 和ヤチヤカリー

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~





考一林ト云  
行二付紙アリ

と巨きり市園古云々みかとのもろい古万葉集と假名  
よきうくはなももいふらぬさしうしとてふ心トアリ又或  
抄に古万葉集古ノ字ニト点アリ要は古万葉集と  
ちうくと同云ふ一の万葉といふ字凡一各点ニ  
私云古ノニト云と文字よきふありてと古万葉集と  
のみつけたり

河万葉集才表を武市代撰し或は万葉抄五卷と云々  
撰し是以後の撰し

古万葉集一部才表平城天皇詔待に撰ら見古今序又  
万葉抄の才一説古く撰し一説梨無の人抄に古万葉抄  
不知撰者し和漢源抄撰はる目録中不見但し  
撰者の抄ありてはるのまゝありてはるし  
後つてはるあり

河原集云天曆五年 宣告ありてはるしと云々大和云々  
らぬる和漢源なる抄に古万葉集に云々云々を  
後をりてはるしと云々河内極清原元輔近江極  
紀時文学生源順御書所願坂上望城七尾近江將藤原  
朝臣伊尹と云々の別當と云々云々行ふ  
古万葉集漢天字のひかゝるはるしと云々と撰し  
てはるしと云々云々古万葉集ありてはるしと云々

延喜乃みかこの古今集と  
延喜の抄に撰しはるしと云々集なるはるしと云々  
やよつたりゆとはははつるありてはるし  
からのわさるるのこゝと云々ひかりなるはるしと云々  
此ははるしと云々のしるしと云々のしるしと云々  
唐海標紙 續表紙 玉軸 淡香但紐  
と云々のしるしと云々のしるしと云々のしるしと云々  
私図 啄木ノ類

かかろしと玉のりく<sup>子ギ</sup>と漢着る玉の袖のしりた  
はらとにれいのしらとくし

河首能去皆振よ神と稽うくまくり玉義取う神よ  
と稽く<sup>神</sup>の神あり行成り十二の指とまくりま<sup>神</sup>なり  
かかるとるあらみ

灯とくしと玉のりく<sup>子ギ</sup>と漢着る玉の袖のしりた  
はらとにれいのしらとくし

此比の人か<sup>子ギ</sup>と漢着る玉の袖のしりた  
はらとにれいのしらとくし

とくしと玉のりく<sup>子ギ</sup>と漢着る玉の袖のしりた  
はらとにれいのしらとくし

とくしと玉のりく<sup>子ギ</sup>と漢着る玉の袖のしりた  
はらとにれいのしらとくし

ま<sup>子ギ</sup>と漢着る玉の袖のしりた  
はらとにれいのしらとくし

とくしと玉のりく<sup>子ギ</sup>と漢着る玉の袖のしりた  
はらとにれいのしらとくし

侍後<sup>子ギ</sup>と漢着る玉の袖のしりた  
はらとにれいのしらとくし

とくしと玉のりく<sup>子ギ</sup>と漢着る玉の袖のしりた  
はらとにれいのしらとくし

とくしと玉のりく<sup>子ギ</sup>と漢着る玉の袖のしりた  
はらとにれいのしらとくし

とくしと玉のりく<sup>子ギ</sup>と漢着る玉の袖のしりた  
はらとにれいのしらとくし

御繪と母とのついでに信申よりのとぬの日記

必繪合ふいふの明之のあきとていふれきれとて本日  
託ありて矣

私言ふよ繪合よおふれとていふれとていふれ但繪  
合よおふれと申ふよとていふれとていふれとていふれ

世とていふれとていふれとていふれとていふれ  
明之信とていふれとていふれとていふれとていふれ

内之引とていふれとていふれとていふれとていふれ  
内之信とていふれとていふれとていふれとていふれ

いぬまの信ありとていふれとていふれとていふれ  
いぬまの信ありとていふれとていふれとていふれ

いぬまの信ありとていふれとていふれとていふれ  
いぬまの信ありとていふれとていふれとていふれ

かの人とていふれとていふれとていふれとていふれ  
かの人とていふれとていふれとていふれとていふれ

かの人とていふれとていふれとていふれとていふれ  
かの人とていふれとていふれとていふれとていふれ

かの人とていふれとていふれとていふれとていふれ  
かの人とていふれとていふれとていふれとていふれ

かの人とていふれとていふれとていふれとていふれ  
かの人とていふれとていふれとていふれとていふれ

かの人とていふれとていふれとていふれとていふれ  
かの人とていふれとていふれとていふれとていふれ

かの人とていふれとていふれとていふれとていふれ  
かの人とていふれとていふれとていふれとていふれ

かの人とていふれとていふれとていふれとていふれ  
かの人とていふれとていふれとていふれとていふれ

かの人とていふれとていふれとていふれとていふれ  
かの人とていふれとていふれとていふれとていふれ

かの人とていふれとていふれとていふれとていふれ  
かの人とていふれとていふれとていふれとていふれ

かの人とていふれとていふれとていふれとていふれ  
かの人とていふれとていふれとていふれとていふれ

ありみくりさういこり

必六後すくせしひいよ

せ井戸のちれいのひい

かしくあや

必源し夕魯方のひらす

必源氏まれ夕魯方より

かの

必や井戸の

右の

右大井に若杉黒土稻の又を

図よ

物

夕魯方のむき

か

必と

と

い

美源氏の又み

必源

必源

必源

必源

必源

今

必源

必源

必源

必源

必源

或

又

と

あつてふらふらあつて

有世といふ地ありある縁あるんといふあぢ  
くよいひりり伯山といふあつていふいふ  
あるといふあつていふあつていふあつて  
あつていふあつていふあつていふあつて

あつていふあつていふあつていふあつて

東に後あつていふあつていふあつていふあつて

私言のらあつていふあつていふあつていふあつて

あつていふあつていふあつていふあつて

あつていふあつていふあつていふあつて

あつていふあつていふあつていふあつて

あつていふあつていふあつていふあつて

あつていふあつていふあつていふあつて

あつていふあつていふあつていふあつて  
あつていふあつていふあつていふあつて

あつていふあつていふあつていふあつて

あつていふあつていふあつていふあつて

あつていふあつていふあつていふあつて

あつていふあつていふあつていふあつて

あつていふあつていふあつていふあつて

あつていふあつていふあつていふあつて

あつていふあつていふあつていふあつて

あつていふあつていふあつていふあつて

あつていふあつていふあつていふあつて

あつていふあつていふあつていふあつて

あつていふあつていふあつていふあつて

あつていふあつていふあつていふあつて

あつていふあつていふあつていふあつて

あつていふあつていふあつていふあつて

あつていふあつていふあつていふあつて

あつていふあつていふあつていふあつて

あつていふあつていふあつていふあつて

あつていふあつていふあつていふあつて



奥女のおかし

りはあやうらな

りいあやうらなてせ申うらな

又女のおかしうらなてせ申うらな

うれうらな

いおまうらな

目地のおかし種伝るん

のこやうはあやうらな

ほの夕音をあらうらな

うらな

夕音のんく根ぶく

根夕音のん実伝るもほの

女まつ孫うらな

も夕音のん

うへいりれらう

いあ根ぶく

けう或あけ

師のあかりい

夕音の文を

ゆう

ぬう

い偽り物

いりけう

わう夕音の文

あう

美川



せたりけり人々をなすりて人の心  
兼て身もなすりてや井の心はひさすいひの心  
申替れ家をん  
必ふよまら申替れ身もなすりて  
大層な事なりては行りて  
申替れ家をん  
かゝる心なり

河津仕大臣の心はなすりては  
ひさす心なり  
大層申替れの心はなすりては  
の心なり  
かゝる心なり  
必ふよまら申替れ身もなすりて  
大層な事なりては行りて  
申替れ家をん  
かゝる心なり

と申す心なり  
河津仕の心はなすりては  
ひさす心なり  
大層申替れの心はなすりては  
の心なり  
かゝる心なり  
必ふよまら申替れ身もなすりて  
大層な事なりては行りて  
申替れ家をん  
かゝる心なり

む せし井戸のかりひのよき

む かかり守候とあり

かかり守候のちかれとていふ。内太右の以後つて  
とてかり守候とありしをいふ。昔人のいふ

いあるあり

む た寄方よりりの又し

む かかり守候とありしをいふ。昔人のいふ

善しなるあり

善しなるありとていふ。世のしほはぬりてわすれぬ人なり。よきなる  
まじりたるをいふ。井戸のしほはぬ人なり。寄方よりり

む かかり守候のしほはぬ人なり。寄方よりり

とていふ。昔人のいふ。昔人のいふ。昔人のいふ。

善しなるあり

私を井戸のしほはぬ人なり。寄方よりり

とていふ。昔人のいふ。昔人のいふ。昔人のいふ。

つねにいひしをいふ。昔人のいふ。昔人のいふ。昔人のいふ。

む かかり守候のしほはぬ人なり。寄方よりり

とていふ。昔人のいふ。昔人のいふ。昔人のいふ。

もれ竹のむらさきとていふ。昔人のいふ。昔人のいふ。

む かかり守候のしほはぬ人なり。寄方よりり

とていふ。昔人のいふ。昔人のいふ。昔人のいふ。

とていふ。昔人のいふ。昔人のいふ。昔人のいふ。

とていふ。昔人のいふ。昔人のいふ。昔人のいふ。

む かかり守候のしほはぬ人なり。寄方よりり

とていふ。昔人のいふ。昔人のいふ。昔人のいふ。

とていふ。昔人のいふ。昔人のいふ。昔人のいふ。

とていふ。昔人のいふ。昔人のいふ。昔人のいふ。

とていふ。昔人のいふ。昔人のいふ。昔人のいふ。

とていふ。昔人のいふ。昔人のいふ。昔人のいふ。

とていふ。昔人のいふ。昔人のいふ。昔人のいふ。

とていふ。昔人のいふ。昔人のいふ。昔人のいふ。

とていふ。昔人のいふ。昔人のいふ。昔人のいふ。

とていふ。昔人のいふ。昔人のいふ。昔人のいふ。

とていふ。昔人のいふ。昔人のいふ。昔人のいふ。



弄花 押紙

放出 和

應仁三年十二月十六日御即位叙位執筆 通俊卿記

日東對代南四間為放出母屋并廟東西行橫切懸翠

簾副西障子立四尺屏風南小行對座敷高簾格付 大正行執筆五天

為公御座橫切御簾前南西敷同座一牧指改座

同日時範託

御直序東對放出四个間 十三日放出三个間而今夜 西面御簾

格付副立四尺御屏風五帖小簾格付 大正行執筆五天并寄東敷

當同座一枚為當御座南去六尺許敷同座為執筆同座





